

としてまとめた。自己成長力の国際比較研究や自己成長力の働きかけについての調査も既に行っているのだからについても何らかのかたちでまとめていきたい。

3. 教師の雑談に関する研究

これはまだ研究発表をしてないが、院生の陳・浦上両君とともに開始した。今年は大学生と教師に対してどんな内容の雑談を聞いた(話した)のか、さらにそれによって親しみが增大するのか、成長力が增大するのかを問う調査を実施した。この結果の一部は梶田正巳編「成長への人間のかかわり—心理・教育学的理解(有斐閣)」に掲載する予定であるが、教師の雑談は子どもとの間の信頼関係を築く機能があり、動機づけの問題とも関係するものと考えている。

4. 児童のリーダーへの動機づけに関する研究

最近では学級委員に立候補する子どもが少なくなっているという教育現場の声があるが、それはどのような理由によるのだろうか。このような現実の問題から児童のリーダーへの動機づけの研究を院生の栗林君と始めた。これ

までリーダーシップ研究に動機づけという概念はあまり用いられていないが、新しい角度からの研究が期待できる。日本心理学会第58回大会でこの成果の一部を発表した。

5. その他

分担執筆

速水敏彦 1994 現代青年の感情と動機づけ 久世敏雄編 現代青年の心理と病理 福村出版 55-67

速水敏彦 1994 学習の動機づけ 増田末雄編 教授・学習の心理 福村出版 68-78

速水敏彦 1994 観察法・評定法を用いた評価の実際 北尾倫彦編 よさを発見する指導と評価 ぎょうせい 15-30

教育雑誌

速水敏彦 1994 発問が魅力ある授業を創る 月刊国語教育 5月号 東京法令出版 10-13

速水敏彦 1994 親の生活態度が子どもの学習習慣に与える影響 児童心理 6月臨時増刊 41-47

研究経過報告

—最近2年間の報告—

野口裕之

この10月1日で東海道新幹線が開業30周年を迎えた。30年前、今は政令指定都市となったある地方都市で、朝早く起きてTVの画面で東京6時00分発の「ひかり1号」の出発式の様子に見入っていたことがなつかしく思い出される。以来30年、新幹線は日本の主要都市を結び、乗客の死傷事故「0」を記録し続けている。10年後には中央新幹線が開業し、リニア方式でなくても、名古屋と東京とは1時間程度で結ばれる事になる。名古屋が東京・大阪の通勤圏に入ると考えるか、東京・大阪が名古屋の衛星都市になると考えるかは、人によるであろうが、何れにせよ技術の進歩は大したものである。

ところで、私自身のこの2年間の進歩はというと極めて遅々としたものである。何故、2年間かという昨年のこの欄に研究経過報告を書いていないからである。「報告すべきものがなかったからだろう」という天の声も聞こえる。誠にその通りである。

この2年間は、研究・教育ともに項目反応理論の実用化及び普及という事に重点を置いて来た。東日本旅客鉄道安全研究所からの受託研究である「コンピュータを用

いた適応型知能検査の開発」については、1993年3月と1994年3月に報告書を提出して正規の研究期間を終了した。しかし、それは受託研究としての区切りをつけたというだけで、研究そのものは現在も継続している。解決すべき問題は項目反応理論の「モデル」からパーソナル・コンピュータを媒体としてテストを実施する事に対する「受験者の反応」に至るまで多種多様である。成果の一部は、名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—の第40巻及び第41巻に発表した。また、1994年の日本心理学会及び日本教育心理学会の年次大会でも発表した。学会で口頭発表するのは久しぶりなので、緊張して足が震えながらOHPの操作をしていた。初心にもどった気分である。この受託研究及びその継続研究からは学ぶ事が多かった。例えば、パーソナル・コンピュータのDOSやC言語に関しては全くゼロの状態だったのが必要に迫られてある程度わかるようになった。少なくとも、過度に期待したり恐れたりすることはなくなった。昔から尻に火が着かないと動かないという悪い癖があったが、今もあまり変わっていないという事である。個別実験によるデー

教育心理学教室教官の研究状況報告

タの収集がいかに大変であるかという事も身をもって知る事ができた。幸い協力的な被験者のおかげである程度の数のデータを集める事ができたが、さらに努力せねばならない。さらに、モデルの精緻化と実用性という点で色々と考えさせられている。この点については、いつか自分なりの見解を実際の分析例を使ってまとめてみたいと思っている。

項目反応理論の実際の測定場面への適用研究として、村上 隆教授の下で従来から取り組んでいる「外国人日本語能力試験の分析」がある。この2年間とも分析報告書の一部を執筆した。オーソドックスなIRT分析を繰り返しているが、毎年図表の表現などに少しずつ改良・工夫を加えている。思い切った分析も試行してみたいのであるが諸々の事情から現在のところ果たせていない。また、南山大学の渡辺直登教授を中心とした、職務興味

インデックスを項目反応理論に基づいて尺度化する研究に参加し、これまで教育心理学の中で育ってきた私には新鮮な刺激を得る事ができた。その成果は産業・組織心理学研究誌に掲載された。

色々な事情で研究に集中できない2年間であったが、新しい目を開くことができた2年間であった。所属学会も、産業・組織心理学会や日本交通心理学会に加入が認められ、大会に参加して興味をそられるテーマの多い事に感激した。学部学生の時期からずっと「教育心理学科」に所属して来たせいもあって、私自身「教育」の枠からはみ出してものを考えられなくなっていたようである。「不惑」の年は過ぎたはずなのであるが、いやそうではなく「惑わず」私自身の枠を壊したいと思う。さて、n年後ここにどんな報告ができるのだろうか。